2016年度入学試験問題

国　　語

（試験時間　14：50～15：50　60分）

1．解答用紙には，記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。

2．解答は，必ず解答欄に記入およびマークしてください。解答欄以外への記入およびマークは無効となりますので注意してください。

3．解答は，HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し，訂正する場合は，プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に，マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。

4．解答用紙を折り曲げたり，汚したりしないでください。また，マーク解答用紙を記述解答用紙の下敷きに使用しないでください。

5．解答用紙には，必ず受験番号と氏名を記入およびマークしてください。

6．マーク解答用紙への受験番号の記入およびマークは，コンピュータ処理上非常に重要なので，誤記のないよう特に注意してください。

一　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（50点）

ハイデッガーは二〇世紀の大陸系哲学を代表する哲学者であり、ラッセルは二〇世紀の英米系分析哲学を代表する哲学者である。これら二つの傾向はいまに至るまで対立し続けており、両者ともに相手を哲学として認めようとしていない。だが、こうした対立にもかかわらず、二〇世紀初頭を体験したこれら二つの偉大なる知性は、同じ時期にまったく同じ危機感を抱いたのである。取り立てて不自由のない生活のなかに(1)スくう不幸。物言わぬ霧のようにただよってくる退屈。それに危機感を抱いた二人の哲学者は、イギリスとドイツで同時にこれへの対応を試みたわけだ。

退屈とは何か？　ラッセルが『幸福論』の中で出した答えはこうだ。退屈とは、(2)事件が起こることを望む気持ちがくじかれたものである。どういうことだろうか？　ラッセルの言わんとするところを理解するためには、ここで「事件」が何を意味しているのかを明確にしなければならない。人は毎日同じことが繰り返されることに耐えられない。「同じことが繰り返されていくのだろう」と考えてしまうことにも耐えられない。だから、今日を昨日から区別してくれるものを求める。もしも今日何か事件が起きれば、今日は昨日とは違った日になる。つまり、事件が起きれば同じ日々の反復が断ち切られる。だから人は事件を望む。しかし、そうした事件はなかなか起きはしない。こうして人は退屈する。これが、「事件が起こることを望む気持ちがくじかれたもの」という退屈の定義の意味するところである。こう考えると奇妙なことに気がつくだろう。退屈する心が求めているのは事件である。ならば、事件はただ今日を昨日から区別してくれるものであればいい。すると、その事件の内容はどうでもよいことになる。不幸な事件でもよい。悲惨な事件でもよい。

「他人の不幸は蜜の味」と言われる。だれかが他人の不幸を快く感じたとしても、それはその人の性質が根底から(3)ネじ曲がっていることを意味しない。この蜜の味には、ある構造的な要因があるのだ。しかもそれどころではない。事件を望む気持ちは、他人の不幸はもちろんだが、我が身に降りかかる不幸にすら及ぶだろう。退屈する人間はとにかく事件が欲しいのだから。したがって最終的に次のように述べられることになる。「ひと言で言えば、退屈の反対は快楽ではなく、興奮である」。退屈している

とき、人は「楽しくない」とおもっている。だから退屈の反対は楽しさだとおもっている。しかし違うのだ。退屈している人間が求めているのは楽しいことではなくて、興奮できることなのである。興奮できればいい。だから今日を昨日から区別してくれる事件の内容は、不幸であっても構わないのである。

退屈する人間は興奮できるものなら何でも求める。それほどまでに退屈はつらく苦しい。それにしても、人が快楽など求めていないとは驚くべき事実である。「快楽」という言葉がすこしかたいなら、「楽しみ」と言ってもいいだろう。退屈する人は「どこかに楽しいことがないかな」としばしば口にする。だが、彼は実は楽しいことなど求めていない。彼が求めているのは自分を興奮させてくれるものである。これは言い換えれば、快楽や楽しさを求めることがいかに困難かということでもあろう。楽しいことを積極的に求めるというのは実は難しいことなのだ。有名な聖書の言い回しをもじって、こんな風に言えるだろうか。

「幸いなるかな、(4)を求めることができる人。彼らは事件を(5)ことがないだろう」

ラッセルの考え方は本書の試みにとって重要な参照点である。そこから学ぶべきことは実に多い。ある意味では本書の結論がそこに書かれていると言ってもいいぐらいである。だが、その点を強調したうえで、疑問点についてもここで述べておきたい。『幸福論』の読後感には何かすっきりとしないものがある。(6)シャクゼンとしないものが残る。ラッセルが同書の第二部「幸福をもたらすもの」のなかで到達する答えは簡単だ。熱意、これである。幸福であるとは、熱意をもった生活を送れることだ――これがラッセルの答えだ。

彼が言いたいのは、熱意をもって取り組める活動が得られれば幸福になれるということだ。だからその活動はどのようなものでも構わない。仕事、趣味、さらには主義主張を信じること。熱意をもてる活動はたくさん転がっているとラッセルは主張する。したがって、ラッセルが最終的に提案する幸福になるための秘訣(ひけつ)は次のようなものになる。あなたの興味をできるかぎり幅広くせよ。そして、あなたの興味をひく人や物に対する反応を敵意あるものではなく、できるかぎり友好的なものにせよ。これは

これですばらしい結論である。これ自体にはだれも反論しないだろう。本書の結論もこのラッセルの結論とそれほど異なったものにはならないかもしれない。だが、やはり何かが足りない気がする。退屈している人にこう言ったところでどれほどの効果が期待できるだろう？　彼らは言うだろう。――自分だって、興味をひく人や物に対してできるかぎり友好的に接したいとおもっているんだ。けれど、そうした人や物がいったい何なのか、どこにあるのか分からないのだ、と。

ラッセルによれば熱意をもった生活をおくれることが幸福である。さて、この観点からみると、一九三〇年段階でのヨーロッパの青年は不幸に陥りがちである、とラッセルは言う。ヨーロッパではすでに多くのことが成し遂げられている。これから青年たちが苦労して作り上げねばならない新世界はおそらく存在していない。だから、ヨーロッパの青年は不幸に陥りがちなのだ。それに対し、ロシアの青年たちはおそらく世界で最も「幸福」な青年である。なぜなら革命を経た彼らは、いままさに、新しい世界を作ろうとする、その運動のなかに生きているからである。ラッセルは当時の日本の青年たちにも言及している。インドや中国や日本の青年たちは政治状況故にその「幸福」を妨げられているけれども、ヨーロッパの青年たちのように[7]内的な障害が存在しているわけではない。つまり、政治状況が変われば、彼らは、新しい世界を作り上げていく運動を始めることができる。彼らもまた幸福になれる……。

熱意こそが幸福の源泉だと言うのだから、このような議論が出てくるのは当然である。しかし、これで本当によいのだろうか？　やるべきことが残っている世界に生きている者は幸福で、やるべきことが残っていない世界に生きている者は不幸であると、そんなことでいいのだろうか？　当時のロシアや日本の青年について言われていることにも大いに問題がある。新しい世界を建設するという課題が与えられ、それによって熱意を得ること、それは本当に幸福なのだろうか？　熱意をもって取り組むべきミッションを外側から与えられること、それを幸福と言ってよいのだろうか？　熱意さえもてればいいのだろうか？

人類はこれまで、豊かな社会を築き上げるためにさまざまな活動に取り組んできた。だが、ラッセルの言うとおりならば、「一生懸命に働かなければならなかった時代、あのときが一番幸せだったよね」というありふれた[8]テイネンに陥る他ない。豊かになったら今度は、「頑張っていた頃が一番幸せだったよね」などと口にするというのなら、不幸のなかに人々を投げ込んでお

けばよかろう。その方が「一生懸命に働かなければならない」のだから「幸せ」であろう。

なぜこんなことを言うのか？　それはラッセルの答えが不気味な案を招き寄せるようにおもえるからだ。もしも、外側から課題を与えられ、熱意をもてれば幸福になれるというのなら、何でもよいから熱意がもてる課題を適当に与えてやればよいということになるだろう。若者のエネルギーが余っているから、彼らを奮い立たせるような課題を作り上げて、そこでエネルギーを使い切ってもらえばいい、そうなるだろう。たとえば、社会が停滞したら、戦争をすればいい。熱意はおそらく幸福と関連している。だが、ラッセルはそこから「熱意さえあれば幸せである」という結論に至ってしまった。そこが問題である。実際、ラッセルは熱意の傾けられる道楽や趣味が、大半の場合は根本的な幸福の源泉ではなくて、現実からの逃避になっているとも指摘している。しかもラッセルは、本物の熱意とは、忘却を求めない熱意であるとも述べている。彼は「熱意」とみなされる現象が、単に現実から眼をそらす逃避や忘却のための「熱意」でありうる可能性に気づいているのだ。ならばなぜ、「新世界の建設」という課題が与えられているからロシアの青年たちは幸福であるなどと簡単に断言できるのだろうか？　日本の青年たちも政治状況さえ変われば「新世界の建設」を始められるから幸福であるなどと断言できるのだろうか？　当時のヨーロッパの青年たちを、当時のロシアや日本の青年たちと比べるという視点そのものが完全にまちがっていると言わねばならない。これは、現代のそれなりに裕福な日本社会を生きる若者を、発展途上国で汗水たらして働く若者たちと比べて、「後者の方が幸せだろう」と言うのに等しい。不幸に憧れてはならない。したがって、不幸への憧れを作り出す幸福論はまちがっている。

今度は別の哲学者の退屈論を取り上げよう。本章の冒頭で言及したスヴェンセンの『退屈の小さな哲学』である。スヴェンセンはこの本を専門的にならないように、いわばカジュアルなものとして書いたと言っている。たしかに彼の口調は軽い。だが、その内容はほとんど退屈論の百科事典のようなものだ。もし退屈についての参考文献表が欲しいとおもえば、この本を読めばよい。参照している文献の量では、本書はスヴェンセンの本にはかなわない。

スヴェンセンの立場は明確である。[9] 退屈が人々の悩み事となったのはロマン主義のせいだ――これが彼の答えである。ロマン主義とは一八世紀にヨーロッパを中心に現れた[10]シチョウを指す。スヴェンセンによれば、それはいまもなお私たちの心を規定

している。ロマン主義者は一般に「人生の充実」を求める。しかし、それが何を指しているのかはだれにも分からない。だから退屈してしまう。これが彼の答えだ。

人生の充実を求めるとは、人生の意味を探すことである。スヴェンセンによれば、前近代社会においては一般に集団的な意味が存在し、それでうまくいっていた。個人の人生の意味を集団があらかじめ準備しており、それを与えてくれたということだ。たとえば、共同体はある若者を一人前と認めるための儀式や試練（成人の儀式等々）を用意する。個人はそれを乗り越えることに生きる価値を見出す。

ところが、近代以降、このような意味体系が崩壊する。生の意味は共同体によって一方的に与えられるような一元的なものではなく、いろいろな方法で探すことができるものになった。言い換えれば、生の意味が共同体的なものから、個人的なものになった。そこからロマン主義が生まれる。ロマン主義者は、生の意味は個人が自らの手で獲得すべきだと考える。とはいえ、そんなものが簡単に獲得できるはずはない。それ故、ロマン主義者たる私たち現代人は退屈に苦しむというわけである。

一八世紀の啓蒙主義の時代では、人間は理性的存在として平等であり、平等に扱われねばならないと盛んに論じられた。ロマン主義はそれに対する反動である。個人はそれぞれ違うのであって、理性とかいった言葉で一様に扱ってはならない。ロマン主義が現れる以前の世界では、経済的な不平等、身分にもとづく不平等が社会の全体を覆っていた。したがってそこでは平等の実現こそが至上命題であった。だが、多かれ少なかれ平等が達成されると、こんどは再び不平等が求められたわけだ。「他人と違っていたい」とは、だれもがいつでも抱いている気持ちのようにおもわれるかもしれないが、それは大変疑わしい。スヴェンセンによれば、この気持ちはロマン主義という起源をもつ。そして、「僕たち現代人はロマン主義者のように考えている」。私たちはロマン主義という病に冒されて、ありもしない生の意味や生の充実を必死に探し求めており、そのために深い退屈に襲われている。だからロマン主義を捨て去ること。スヴェンセンによれば、それが退屈から逃れる唯一の方法である。「退屈と闘うただ一つ確かな方法は、おそらくロマン主義と決定的に決別し、実存のなかで個人の意味を見つけるのをあきらめることだろう」。どうやってロマン主義を捨て去ればいいのか？　自分の心のどこに、どのような形でロマン主義があるのかも分からないのに？

そもそも、ロマン主義的な心性をもった人間がそれを捨て去ることはできるのか？　スヴェンセンの言うように、それは単に「あきらめる」ということではないのか？　つまり、「お前はいま自分のいる場所で満足しろ」「高望みするな」というメッセージにすぎないのではないか？　してみると、スヴェンセンの書きぶりは、この結論的メッセージの単純さを覆い隠すための衒学(げんがく)(11)的装飾であったのではないかとすらおもえてしまう。退屈とロマン主義というテーマ自体は大変興味深いものだが、スヴェンセンは退屈の問題をそこに集約させすぎている感がある。スヴェンセンの著書に、参考にすべき点は多いが、退屈をロマン主義に還元する姿勢はとても支持し得ないし、彼の解決策にはまったく納得できない。

（國分功一郎『暇と退屈の倫理学』による）

注　ハイデッガー……ドイツの哲学者（一八八九～一九七六）。　ラッセル……イギリスの哲学者（一八七二～一九七〇）。
スヴェンセン……ノールウェーの哲学者（一九七〇～）。

〔問一〕　傍線(1)(3)(6)(8)(10)のカタカナを漢字に改めなさい。（楷書で正確に書くこと）

〔問二〕　傍線(2)「事件」とあるが、この語が指し示す内容を十三字以上十五字以内で抜き出しなさい。（句読点は一字に数えない）

〔問三〕 空欄(4)(5)に入れるのにもっとも適当なものをそれぞれ左の中から選び、符号で答えなさい。

(4)
A 退屈
B 事件
C 快楽
D 不幸
E 幸福

(5)
A 忘れる
B 厭(いと)う
C 恐れる
D 歓ぶ
E 求める

〔問四〕 傍線(7)「内的な障害」とあるが、これと同じ「内的な障害」を表している状況としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A アルバイト先で一番人気のAさんと付き合い始めたが、連日連夜、メッセージへの返答を要求され、自分の時間が無くなり、交際が煩わしくなった。

B 一流企業のB商事に入社したものの、同僚や上司の使い走りをさせられる上に、残業につぐ残業で体調を崩してしまい、会社に行くのが嫌になった。

C 強豪C大学の野球部で実績が認められ主将になったが、後輩達の指導や作戦会議等で、部活動に精を出し過ぎたために、家族や友人の信頼を失った。

D 第一志望のD大学に入学したが、授業や友達の話には何の新鮮味もなく、サークルやゼミにも意義を感じられないので、大学に行く理由を見失った。

E 長年勤めた会社を辞め、念願の田舎暮らしをするために、E村に新築の家を買ったが、慣れない近所付き合いや風習、農作業でストレスが溜まった。

〔問五〕 傍線(9)「退屈が人々の悩み事となったのはロマン主義のせいだ」とあるが、その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A ロマン主義では社会より個人を重んじるので、人が生きる意味は社会が与えるのを待つのではなく、各個人が好き勝手に追求するべきと考えられるが、そんなことは容易ではないから。

B ロマン主義では個人より社会を重んじるので、人が生きる意味は個人が自主的に追求するのではなく、社会が等しく個人に与えるべきと考えられるが、そんなことは容易ではないから。

C ロマン主義では多元性より一元性を重んじるので、人が生きる意味は多種多様な他者が構成する社会でなく、特定の他者が与えるべきと考えられるが、そんなことは容易ではないから。

D ロマン主義では現実より理想を重んじるので、人が生きる意味は他者からあれこれ指図されず、個人が納得のいくものを追求するべきと考えられるが、そんなことは容易ではないから。

E ロマン主義では特殊性より普遍性を重んじるので、人が生きる意味は個人が一人でなく、様々な考えを持つ他者と共同して追求すべきと考えられるが、そんなことは容易ではないから。

〔問六〕 傍線(11)「衒学的装飾」とはどういうことか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 退屈という問題を論じる際、ロマン主義で理論武装し、みずからの主張を飾りたてる態度。

B 退屈という問題を論じる際、数え切れないほどの参考文献を使い、博学をひけらかす態度。

C 退屈という問題を論じる際、専門性を隠しながら、わざと軽妙な口調で語ってみせる態度。

D 退屈という問題を論じる際、関係のないロマン主義を持ち出しつつ、議論を煙に巻く態度。

E 退屈という問題を論じる際、ロマン主義にだけ議論を集中させ、退屈の本質を眩(くら)ます態度。

〔問七〕 次の文ア～エのうち、本文の内容と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア　退屈している人に対して、ラッセルは積極的な解決法を提案し、スヴェンセンは消極的な解決法を提案する。

イ　退屈から脱するための方法について、ラッセルは一元論を、スヴェンセンは多元論をそれぞれ主張している。

ウ　退屈している人が退屈から脱したのち、ラッセルとスヴェンセンは共にその人は幸福になれると考えている。

エ　退屈している人が退屈から脱するには、ラッセルとスヴェンセンは共に自ら行動を起こす必要があると説く。

二　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（20点）

日本語においては、西欧語の「イエス」「ノー」にあたるそれぞれの一語が存在していないのはよく知られている。ある質問に肯定的に答える場合は、「はい」「ええ」「うん」「そう」「さよう」など、否定的に答える場合は、「いいえ」「いいや」「ううん」「ちがう」「そうじゃない」など、その他、多くの答え方が想像される。これらの言葉の選択の幅は、性、年齢、社会的地位などによってある程度制限されてはいるが、だからと言って、ある年齢、ある職業の人物が、いつも「うん」と答えたり、「いいや」と答えたりするわけではない。このひとの答え方は、例えば、職場の上役、同僚、学校の先輩、昔の友人、妻など、会話の相手によって変るのがふつうである。つまり、返答の言葉の基本的性格は、[(1)]的である。

「あなたが夢にみたそのひとは、お母さんでしたか」、あるひとがこのような質問をしたとする。西欧語を話すひとにとっては、これに対して肯定か否定で答えるのは自明のことに思われ、心理的にもそのような用意がなされているかもしれない。しかし、日本語の実際においては、事態はそれほど簡単ではない。状況によっては、聞かれた方がいつまでも黙っているのは、もちろん珍しいことではない。どっちつかずのまま、もじもじしている場合もある。「さあ」とか「そうねえ」などの言葉から、どちらとも受けとりかねた質問者が、「肯定か否定で、はっきり答えて下さい」と迫ったとすれば、そのときから、会話は多分に改まった、[(2)]的な様相をおびて、日常的な自然の状態から離れてしまう。

日本語においては、いわば肯定と否定の中間領域が、言語活動のうえからも、はるかに広く許容されていると言える。どっちつかずの態度も、日常のいたるところで接することのできる、質問に対する多分に正当な答え方のひとつであって、日本語のなかからは、この態度に呼応する言葉を多数見いだすことができる。しかも、[(3)]的に眺めた場合は、答える方の、ややまだるこしい沈黙のなかに重要な意味が含まれている。答える方は、この沈黙のあいだに何かを探しているのである。それは、このひとにとって、ありのままの事実よりもっと大切なものである。

「そういうことは、考えたことがありません」あるいは、「そういうことは思ってもみませんでした」。フロイトは、被分析者

がこのような言葉によって答えを示すときほど、無意識の内容のみごとな発見を証明するものはないと言っている。しかし、さきの質問者にとっては、日本語における、この時間のかかる、しかも中立的で、曖昧な答えはやっかいなものである。こちらは、やっと引きだした答えから、そこにはたして抑圧があったのか、また、もしあったとするなら、相手のこころのなかでどのような表象が遠ざけられたのか、こうしたことを即座に見ぬくのがいっそう困難である。

もちろん、日本語においても、「そういうことは考えたことがありません」あるいは、「そういうことは思ってもみませんでした」という言葉は、日常の言い方で、よく耳にすることができる。そして、この言語においては、言葉を次のように言いかえると、たしかにいっそうの現実性がそなわるように思われる。すなわち、「あなたの気を悪くしようなどとは考えたこともありません」。あるいは、「私の言ったことがあなたの気にさわるなんて、思ってもみませんでした」、と。

あるひとが会話のなかで相手に与える快の分量、それは、われわれの社会の言語活動におけるもっとも大きな関心事であると言ってよい。つまり、会話においては、自分の答えによって相手に快を与えることが配慮の中心となっている。だから、あるひとは、相手が自分からどのような答えを期待しているか、このことにいつも心理的な関心を寄せていると言ってよい。長い沈黙の時間に意味があるというのは、じつはそれがこのための答えを探る努力の過程となっているからである。即答を避ける傾向や、答えを運ぶ曖昧な表現も、このことに照らすならば、やはり有意的である。このような努力のすえに、他人を傷つけることのない、中立的な表現に達するのである。

したがって、会話における二人の当事者から独立した、ありのままの事実は、会話においてそれほどの重要性をもっていない。お互いに、目の前にいる相手が、(言いかえると、自分が相手に与え、相手が自分に与える快の分量が)、心理的な現実を覆いつくしていて、お互いから独立した第三者への配慮は、このために背景に退いている。

(4)

、それゆえに、このことが問題の中心となる。日本語による会話は、いままでのところ、本質的に閉じた、秘密の性質をもっている。それは、こういう意味である。会話は、あるひとつの状況のなかで、多少とも共犯関係にある二人の人間の、一対一の対話においてもっとも生気をおび、たとえこれに参加している人間が三人であれ、五人であっても、つまるところ心理

的には二人の人間に還元されうるような性質をそなえている。(5) ここに交換される快は、社会的な上下関係を骨格とする秩序の網の目と、親密さの度合による遠近のそれとの、二枚の網の目を通して濾過されながら、実現される。

日本語においては、第三人称は基本的に排除されている。二人の当事者のなかに割って入るもうひとりの人称は、疎遠で、冷たい。最近、ある論者は、万葉集の時代の日本人にとって、第三人称の人称代名詞は、心理的な次元においてはもともと存在せず、たとえあっても、非常によそよそしい、外国語からの翻訳語の性格をそなえていたのをみごとに説明している。第三人称を心理的に排除した日本語による話法は、つねに「対手論法」であると言ってよい。それゆえ、われわれにとって、「ありのままの事実」「第三人称」、そしてやがて西欧語における「真理」「神」に対する関係は揺れ動く。

いま極端な例を想像するならば、あるひとの話の内容は、検事と弁護士を前にした場合のそれぞれにおいて、異なってくるのである。これは実際に、日本のある重大事件について、一外国人評論家が提出した疑念でもあった。検事を前に語ったことが、「意志のない人間」が「機械的に喋ったにすぎない」全くの虚構であって、それが論証できた以上はこのひとが無罪であると言うなら、その「自白」と正反対の内容を主張する法廷での供述が、「意志のある人間」の「自発的な発言」であるのをどうやって論証するのか。法廷での供述もまた、うそではないかという疑いを晴らす根拠をどこに求めるのか。ちなみに、検事の前での供述は、拷問や並はずれた強制によるものでないのは明らかになっている。しかも、そのひとが虚言症にかかっているわけではなく、日本の社会に特徴とされる対人恐怖症に悩んでいるわけでもないのに、(6) 全く相反する二つの真実が同一人物のなかに存在しうるのは奇妙である、と。

けれども、日本語を話すひとにとっては、目の前の相手と交換し合う快が、ありのままの事実を押しのけるのは、少しも異常でない。相手の期待は、自分にとって、事実よりも重い。自分はそのつど、相手が求めていると自分が空想したように、話したにすぎない。したがって、検事と弁護士のそれぞれに対する正反対の供述も、心理的に矛盾しているとは言えないのである。しかしながら、真実がこの過程において揺動するのはやむをえないのである。

（佐々木孝次『母親・父親・掟』による）

注　フロイト……オーストリアの精神分析学者・精神科医（一八五六～一九三九）。

〔問一〕　空欄(1)(2)(3)に入れるのにもっとも適当なものをそれぞれ左の中から選び、符号で答えなさい。

A　詰問　　B　現実　　C　心理　　D　応答　　E　状況　　F　儀礼

〔問二〕　空欄(4)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　「自分は、いったいだれと話しているのか」
B　「自分は、いったいどのように話せばいいのか」
C　「自分は、いったい何を話せばいいのか」
D　「このひとは、何を聞こうとしているのか」
E　「このひとは、なぜこんな質問をするのか」

〔問三〕　傍線(5)「ここに交換される快は、社会的な上下関係を骨格とする秩序の網の目と、親密さの度合による遠近のそれとの、二枚の網の目を通して濾過されながら、実現される」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　会話における快は、多人数の間でも二人の間でも親しさより社会的な関係の積み重ねによって実現される。
B　会話における快は、社会的な上下関係に規定されるよりも親しさの度合が基本となることで実現される。
C　会話における快は、社会的な上下関係と共に会話における親しさとが相互に調整されることで実現される。
D　会話における快は、二人が属した社会的な上下関係で生まれた親しさの記憶が作用することで実現される。
E　会話における快は、当事者が抱く秩序意識とそれと相反する親しさとが交差することによって実現される。

〔問四〕 傍線(6)「全く相反する二つの真実が同一人物のなかに存在しうるのは奇妙である」とあるが、なぜ「外国人評論家」はそのように思うのか、その説明として適当でないものを左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

A 真実は一つである以上、同一人物が検事と弁護士に対して異なる発言をすることはありえないと思うから。

B 拷問や強制などがないのに、一度受け入れた事実を法廷で覆すことは倫理的にあってはならないと思うから。

C 検事の誘導で不本意な発言をしたあとに一転してそれを撤回したりすることなどあるはずもないと思うから。

D 虚言症や対人恐怖症でもないのに、検事と弁護士への供述が相反するのは真実が二つあることになると思うから。

E 検事と弁護士に語ったことが正反対になるのは、同一人物において論理矛盾が存在することになると思うから。

〔問五〕 次の文ア～ウのうち、筆者の考えに合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア 日本語の会話では、質問に対して相手が長い沈黙に陥り、さらに曖昧な答え方をすること自体に重要な意味があると受け取られる。

イ 日本語の会話や精神分析の治療では、当事者の間の心情よりも社会的に編成された上下関係への配慮が優先される。

ウ 日本語の会話の場面では、たとえ複数の人間がいる場合においても本質的には「一対多」の関係とはならない。

三　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（30点）

坂東のある山寺の別当、学匠にて、弟子門徒多かりけれども、年たけて、中風し床に臥して、身は合期せずながら、命はながらへて、年月を送るままに、弟子ども、看病し疲れて、果てはうち捨ててける。いづくともなく、若き女人一人来たって、「御看病申さんこといかに」といへば、弟子ども、「然るべし」とて許し、えもいはず(1)ねんごろに看病しける。「いかなる人ぞ」と問へども、「まどひものにて候。(2)人に知られ参らすべき者にもあらず」とて、つやつや名乗らず。余りにありがたく看病し、月日も経にければ、この病人申されけるは、「仏法・世法の恩を蒙る年来の弟子だにも、捨ててはべるに、これ程にねんごろに看病したまへるは、然るべき先世の契にこそとまでありがたく思ひたまへるに、いたく隠したまふことこそ(3)いぶせけれ。そもそも、いかなる人にておはすぞ」とあながちに問ひければ、この女人申しけるは、「まことに今は申しはべらん。これは、(4)そのかみ思ひかけぬ縁にあひて、思ひの外なる御事のさふらひける、某と申す者の女なり。それにはかくとも知らせたまはねども、母にてさふらふ者の、『汝はかかることにてあり』と申ししかば、我が身には、心ばかりは、御女と思ひ(5)たまへて、あはれ、見たてまつり、見えたてまつらばやと、年ごろ思ひはべりつるに、この御病に、御看病の人も疲れて、(6)こと欠けたるとうけたまはりて、御孝養に、(7)心安く、あつかひ殺したてまつらんと、思ひ立ちてさふらひつる」と、泣く泣く語りければ、病人も、(8)まめやかに、志のほどの、哀れに覚えて、涙もかきあへず、「然るべき親子の契こそあはれなれ」とて、互ひになつかしきことにて、つひに最後まで看病せられて、心安く終りにけり。

（『沙石集』による）

注　別当……僧の職。　学匠……学者。　合期せずながら……思うようにならないが。
まどひもの……行くあてのない者。

〔問一〕 傍線(1)「ねんごろに」、(3)「いぶせけれ」、(6)「こと欠けたる」、(8)「まめやかに」の解釈として、もっとも適当なものをそれぞれ選び、符号で答えなさい。

(1) ねんごろに

A なれなれしく
B 友好的に
C ことこまかに
D 心をこめて

(3) いぶせけれ

A 恋しい
B むさ苦しい
C 気にかかる
D 恐ろしい

(6) こと欠けたる

A 身よりもなかった
B 正常な判断ができなかった
C 次々と亡くなった
D 人手も物も足りなかった

(8) まめやかに

A 心から
B こまごまと
C 本格的に
D 実用的に

〔問二〕 傍線(2)「人に知られ参らすべき者にもあらず」の解釈として、もっとも適当なものを、左の中から選び符号で答えなさい。

A 皆様に知られてはならない者なのです
B 皆様にお知らせしなければならない者なのです
C 皆様にご承知いただけない者ではありません
D 皆様にご承知いただくほどの者ではありません
E 皆様にお知らせしたいほどの者なのです

〔問三〕 傍線(4)「そのかみ思ひかけぬ縁にあひて、思ひの外なる御事のさふらひける」の内容の具体的な説明としてもっとも適当なものを、左の中から選び符号で答えなさい。

A 昔、私が思いがけないご縁に会って、あなたの娘を産みました
B 昔、私の母が思いがけないご縁に会って、私が生まれました
C 昔、私の娘が思いがけないご縁に会って、あなたと結ばれました
D 昔、私が思いがけないご縁に会って、私の母と出会いました
E 昔、私の母が思いがけないご縁に会って、あなたと出会いました

〔問四〕 傍線(5)の「たまへ」と同じ意味の例を、左の文章の「たまふ」の中から一つ選び、符号で答えなさい。

A 紀の守に仰せ言たまへば、うけたまはりながらしりぞきて

B 御使ひには、かの大蔵の大夫をぞたまへりける

C 女御、(更衣あまたさぶらひたまひけるなかに

D くはしくも知りたまへず女どもの知る便りにて仰せ言を伝へ始めはべりしに

E ふるの滝ご覧じにおはしまして、かへりたまひけるによめる

〔問五〕 傍線(7)「心安く、あつかひ殺したてまつらん」と同じ内容を示している部分を、本文中から選び、最初と最後の五文字を抜き出して示しなさい。(句読点は一字に数えない)

〔問六〕 次の文ア～オのうち、本文の内容と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア 山寺の別当には弟子がひとりもいなかったが、若い女が看病をして、病気を治した。

イ 山寺の別当には身寄りがひとりもいなかったが、弟子たちが看病をして、病気を治した。

ウ 若い女は、弟子たちにも見捨てられた山寺の別当を、亡くなるまで親身になって看病した。

エ 弟子たちにも見捨てられた山寺の別当を、親身になって看病した若い女は、もとの妻だった。

オ 弟子たちにも見捨てられた山寺の別当を、親身になって看病した若い女は、本当の娘だった。